

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	『その人らしく暮らす』の理念に基づき、家族との関係を保ち最期まで安心して暮らせるよう支援している。	法人として目指す「その人らしく」の理念の意味は幅広く、ホーム会議やカンファレンス、申し送り時等に常に話題にあげ、管理者と職員が話し合いを重ね理念に添った支援に努めている。理念にそぐわない言動が職員に見られたときには、後回しにすることなく注意を促し、気づきを持ちケアに当たるように管理者が助言している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事に声を掛けて頂き、参加している。定期的に地域の方が来られ、書道教室やサックス演奏等による関わりをもって頂いている。また、ホームでの行事等では、地域の方を招き交流することが出来ている。	自治会費を納め、年1回行われる地区の公園の草取りに参加している。地域住民とは日頃の散歩時や外気浴時に挨拶を交わしており、ホーム行事で顔なじみの関係ができています。「せせらぎ夏まつり」には民生児童委員が地域の子供達を連れて遊びに来てくれた。高校生や中学生の職場体験を毎年受け入れ、話し相手や洗濯たたみ、散歩など職員と共に利用者関わっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	看護、介護実習生、職場体験等の受け入れを積極的にやっている。地域の方からの見学希望、相談にも乗ったりしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議で、取り上げられた検討事項について話し合い、次に繋げている。現在、取り組んでいることも報告し、意見を頂いている。	会議は1階、2階の利用者家族、区長、副区長、民生児童委員、社会福祉協議会職員、諏訪広域連合職員、法人理事長、職員などをメンバーに定期的に開催され、ホームからの活動状況等の報告の後、出席者からの要望、助言など活発な意見交換の場となっている。開催の曜日や時間帯は土・日いずれかの午前10時からとし、参加していただきやすい日時を選び実施している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	必要に応じて連絡連携をとっている。	茅野市の行政は4地域に別れ執り行われており、ホームは西部保健福祉サービスセンターに属し、推進会議等で顔なじみの関係を築き、様々な相談に乗っていただいている。介護認定の更新手続きは半数の利用者がホームにて行っている。中には、家族が立ち会う場合もある。市の介護相談員の受け入れも行き、利用者の思いや要望を把握した中で助言等をいただき利用者のケアに活かしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については職員一人一人が理解しており、身体拘束のないケアに取り組んでいる。(毎月行うホーム会にて適宜確認、勉強会を行っている。)	日中玄関の施錠はしていないが、ホーム前の道路状況も考慮に入れ、優しい響きの鈴を付け事故防止に配慮している。身体拘束や虐待についての話をホーム会議や打ち合わせなどの場で頻繁に行い、常にサービスに反映できるように勉強を重ねている。	

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	カンファレンスやホーム会にて、学びや確認する機会を持ち、職員一人ひとりが理解を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護の制度を利用している入居者がおり、ホーム会等で適宜取り上げ説明している。又、家族から相談があった際は、関係機関に繋げるなどしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時の契約の際は、入居者や家族と話し合いをし、理解・納得を得られるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や家族の訪問時には、意見・要望を出してもらいようにし、運営に反映させている。	自身の思いや要望を表出することができる利用者が1階、2階とも半数以上おり、思いを伝えることが困難な利用者については、しぐさや表情、利用前の聞き取り調査のシート、ホーム利用後の暮らしの中から得た情報を総合判断し、更に状況に合わせて職員は支援している。せせらぎ会(家族会)と銘打った集まりを毎年11月3日に日を定め開催し、食事会を行っている。要望や希望など、話を直接聞ける機会として大切な行事の一つとなっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回ホーム会を開催し、職員の意見等を出してもらっている。 個人面談も年2回行っている。	ホーム会議は職員の意見をくみ上げたり、利用者へのサービスの方向性を見極め、話し合いを通して情報共有する場となっている。活発な意見交換の場となっており、仕事のために出席できない職員は会議録を必ず読み確認をしている。また、緊急の内容については、管理者が直接職員に話をしている。年2回の個人面談は理事長と管理者が行い、各期の反省と目標の振り返りをしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者はこまめに職場に来ており、業務等の把握に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実践と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ケアの実践と力量の把握をした上で、適した外部研修を受ける機会を作るよう努めている。 研修報告を兼ねた内部研修の場を作っている。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者の交流会に積極的に参加し、情報交換している。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前より直接本人にお会いし話を伺ったり、生活歴などからも情報を得るなどし、不安や要望等の把握に努めている。入居後も安心できるような関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前より家族に見学してもらったり、面談を重ね不安なことや要望等を聞き、信頼関係を築けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の思い・状況を十分に確認し、柔軟な対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の不安な気持ちや楽しみなどの思いを知り、信頼関係を築いている。入居前より、若かりし頃の話を聞かせてもらったり、教えてもらう場面もある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	状況変化のある入居者については家族とこまめに連絡を取り、本人を支えていけるよう努めている。又、遠方の家族には、電話連絡や手紙等により関係が途切れないようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人が会いに来たり、絵手紙が届いたりしている入居者もあり、関係が途切れないよう働きかけ、お礼の電話や返事が出来るよう支援している。	利用前の慣れ親しんだ人や場所との関係をホームとしては大切に考えており、馴染みの美容院を利用するときは基本的にご家族に付き添いをお願いしているが、職員の送迎で行くこともある。独居からの利用者の中には社会福祉協議会の移動サービスを使い週1回自宅に戻り半日過ごされ、自宅を見たいとの希望があれば職員がドライブがてらお連れすることもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個別に話を聞いたり相談に乗るなどし、入居者同士の関係が上手くいくように、職員が調整役となるよう支援している。又、全ての職員が情報を共有し、心身の状態により気分や感情に変化がある為、注意深く見守るようにしている。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用が終了された方も、畑作りを手伝ってもらうなどの継続的なお付き合いが出来ている。又、相談にも乗っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の発した言葉や表情・行動から、思いを汲み取るよう努めている。家族にも意向を聞いている。	ホーム会議や月2～3回のユニットごとのカンファレンスの際に、場面設定を提供することで利用者が選択できるのではないかなど話し合いを重ねている。利用者の良く使う言葉や態度、表情などの反応を見て支援しながら、多方面から総合的に判断し思いや意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前より、必要な情報を得るようにしている。普段の会話より情報を得たり、分からない時は家族から情報を得ている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムや状態を把握し、本人が出来ることは自分でしてもらえよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的にカンファレンスを行っている。日々の関わりの中で、本人や家族から思いを聞く等、入居者主体の暮らしを反映した介護計画作成に努めている。	週1回木曜日、ユニットごとにモニタリングを行い利用者の状態を把握するだけでなく、提供されているサービスの見直しを行い、ニーズに対する援助内容が適切であるか検討をしている。3ヶ月に一度見直しをかけ、変化の著しい利用者については計画を立て直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別にファイルを用意し、食事・水分量・排泄等の身体状況及び、日々の暮らしの様子や言葉・エピソード等を記録している。又、職員の気づきや状態変化についても記録し、職員間の情報共有を徹底している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	必要に応じて受診の付き添いをしたり、馴染みの美容院がある方の送迎もしている。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	生活支援員や民生委員の方が、運営推進会議に参加して頂いており、情報交換している。訪問理美容を活用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	在宅での主治医が継続して往診してもらっている。又、家族や本人が希望するかかりつけ医に繋げ往診してもらっている。必要に応じて、歯科医や皮膚科の往診も受けられるように支援している。	医療法人運営のホームであり、医師でもある理事長の月1回の訪問診療と共に、かかりつけ医としている利用者への往診が毎日1名ずつ行われている。利用前の主治医を継続されている利用者は、ご家族対応で受診をお願いしている。緊急時や初めて受診する場合は介護要約書を持参し適切な医療を受けられるように工夫している。ホームには看護師3名が職員として配置されており、充実した医療体制がとられている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、かかりつけ医との連携をとっている。介護職員は状態変化を看護職員に伝え、共に対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際には医療機関へ情報提供し、職員がお見舞いに行くようにしている。又、早期に退院できるように医師・看護師や家族と話し合いをもつようになっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の意向を踏まえ、医師・職員が連携をとり、安心して納得のいく最期を迎えられるよう、随時意思を確認しながら支援している。希望に沿ってホームでの看取りを行っている。	看取りを行うための体制が整えられている。看護師3名の職員配置があり、終末期医療に関しての職員研修と職員の心のケアを管理者が心掛け、最善の支援ができるよう取り組んでいる。開設以来十数件の看取り経験があり、利用者や家族との話し合いを踏まえ要望に沿いながら支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者急変時マニュアル等で、周知徹底を図っている。救急救命法の研修は年に一度、全職員が受講している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、入居者と共に避難訓練を行っている。地域の協力体制については、運営推進会議にてその都度呼びかけている。消防署の協力を得て避難訓練、避難経路の確認を定期的に行っている。	ホーム周辺の地域環境を考慮に入れ、自然災害対策としての避難訓練を行っている。地域交流スペースは吹き抜けで1階、2階でも聞き取れる最適な場所で、茅野市広報防災ラジオ受信機も置かれ、緊急時の情報収集にも対応できている。水などの備蓄品はホーム建物から少し離れた場所に倉庫を設置し保管している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の気持ちを大切に考え、さり気ない声かけや援助が出来るようにしている。	呼びかけは基本的に名前にさん付けでお呼びしているが、家族や利用者本人の反応を見ながら声掛けをしている。利用者の居室への入室の際には、必ずノックと声掛けで職員は対応している。利用者の尊厳と人格の尊重についてもホーム会議やカンファレンス、申し送りなどでその都度話し合いを行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	意思表示の困難な入居者が増えてきているが、表情や反応を常に見ながら、自己決定が出来るような場面を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、体調やその日その時の本人の気持ちを尊重し、個別性のある支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居者の馴染みの美容室へ行ったり、外出時や行事の時には、おしゃれが出来るように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者に合わせたメニューや食事形態、視覚・嗅覚でも楽しめる食事を提供している。入居者と一緒に収穫した畑の野菜や、家族から頂いた野菜を使って一緒に調理し、職員と入居者が同じテーブルを囲み楽しく食事している。	1階は職員の希望で職員が調理を行い2階は調理専門スタッフを配置し、各ユニットでの食事作りには特徴がある。食事形態はミキサー1名、きざみが3名、また食材によってきざみの大きさを変えている。栄養士作成の献立を基に調理しているが、利用者の健康状態に合わせた料理内容に変更することもある。利用者の楽しみの一つとしてずんだ餅やクレープのお菓子作りがあり、職員は利用者と一緒に買い出しに出掛けている。家族からの米、ぶどう、野菜等のいただき物があり、ホームの庭ではおくら、かぼちゃ、じゃが芋、さつまいも、唐辛子等を栽培し、収穫された食材を調理している。会話の弾む食事の光景が訪問時にも確認された。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者の状態に合った食事量・水分量等、一日を通し確保できるよう支援している。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者一人ひとりに合った口腔ケアを行っている。 週二回、義歯洗浄剤を使用している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	必要な入居者には、排泄パターンを把握するためにチェック表を活用し、さり気ない声によりトイレで排泄できるように支援している。	自立の方は数名で他の方々は一部介助や全介助となっており、夜間ポータブルトイレを使う方も数名いる。スムーズな排便を促すように職員による腹部マッサージや乳製品の摂取に努め、腹圧を掛け排泄を促す構造のトイレでの支援にも努めている。トイレの場所が分かるように、大きな表示が壁にされていた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の方には、牛乳やヨーグルトなどの乳製品を摂ってもらっている。改善が見られない場合は、主治医に相談し対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	職員が一方的に決めつけず、入居者の体調や希望に合わせて入浴をしてもらっている。 入浴時は、本人の話を聴いたり、歌を唄うなど楽しく入浴できるようにしている。	ほとんどの利用者は一部介助で入浴ができる。中には介護度が上がり酸素ボンベを持ち込んでの入浴もあるが、温まり、心身の心地よさを体感していただきたいとの思いで職員は支援をしている。浴槽のお湯は一人ひとり入れ替え感染予防にも留意している。入浴の難しい利用者には声掛けをしたり気分転換をしていただき、無理強いはせず足湯、清拭等の対応をすることもある。入浴剤は皮膚の乾燥を防ぐため品質の良いものを使い、特に好評な淡いラベンダー色やきれいな色の入浴剤を使い楽しんでいただいている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの疲れ具合や体調・睡眠状態に合わせて、日中に休息を取れるように支援している。安心して気持ちよく眠れるよう、夕方から穏やかな時間が過ごせるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬時は本人に手渡し、きちんと内服できているか確認している。薬の説明書を個人ファイルに入れすぐに確認できるようにし、薬の変更時は内容・副作用について申し送りを行い、職員間で共有し状態の変化等の観察に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの力を発揮してもらえるよう、台拭き・洗濯物干し・洗濯物たみ・雑巾縫い等をお願いしている。又、畑作りでは野菜の育て方を教えてもらっている。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者一人ひとりの体調や希望に合わせて、散歩・ドライブへ行っている。遠方への外出時は、事前に計画をたて実施している。又、家族にも協力を得て外出している。	気分転換にホーム建物を囲んでいる屋根付きのバリアフリーデッキを利用者自身が車椅子で気軽に移動し、庭の畑や花を見ながら散策している。天気の良い日には外気浴を兼ね職員とホーム周辺の散歩に出掛け、近所の方と挨拶を交わすこともある。ホーム会議で年間計画を立て、季節に合わせていちご狩りや紅葉狩り、外食など、ドライブを兼ねて出掛けている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族よりお金を預かり、事業所が管理している。訪問販売や買い物に出掛けた際には、職員がお金を入居者に手渡し支払ってもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけたい希望があれば、気兼ねなく電話できるよう配慮している。年賀状や手紙を出せるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、絵手紙や入居者の季節毎のスナップ写真を共用の空間に飾っている。室温・湿度計を設置し、快適に過ごせるよう配慮している。	木をふんだんに使った建物は居心地の良い空間を作り出し、居間兼食堂からは大きな窓を通して庭の木々が望め、閉塞感をまったく感じない。キッチンコーナーは対面式で食事を作りながら利用者と会話ができて、また、利用者の様子を伺うこともでき、使い勝手の良い配置になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	スタッフルーム前、研修室、ペランダにゆっくり過ごせる場所を設けている。フロアでも衝立を使い寛げる空間を作るなどの工夫をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、本人や家族と相談しながら、使いたれた物・馴染みの物を置くようにしている。家族との写真や書道などの作品を飾ったりして、居心地良く過ごせるようにしている。	居室には備え付けのクローゼットやベット、洗面台などがあり、利用者の生活ペースに合わせて配置されている。自宅から持ち込まれた整理ダンスやテーブルなどが置かれ、壁には職員からの誕生日カードや折紙の作品なども飾られ、利用者一人ひとりが暮らしやすく落ち着いて生活できるように工夫されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者が、フロア内を安全に移動できるようスペースを確保し、不必要な物を置かないようにしている。		